



aaca
2024.09

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

no.
99

目次

- ・OPINIONS: 共鳴 [4]
多様化する社会をつなぐ、対話を生む空間とコンテンツの創出を 平田オリザ ————— 1-3
- ・OPINIONS: 共鳴 [5]
「共鳴」の光と影：リベラルアーツの目指すもの 上田紀行 ————— 4-5
- ・素材を知る [2] 石
建築用石材の進化 矢橋修太郎 ————— 6-7
- ・令和6年度定時総会 [総務委員会] 小谷純造 ————— 8
- ・第7回BOX展 [展覧会委員会] 飯田郷介 ————— 9
- ・第12回aacaサロン: インテリアデザインにおけるアートワークの領域について [会員増強委員会] 大西宏治 ————— 10
- ・第13回aacaサロン: 継承設計の取り組み [会員増強委員会] 石原智也 ————— 11
- ・第205回aacaフォーラム:
街とアートが織りなす出会いの場(その4):「ハタオリマチ」視察 [フォーラム委員会] 萩尾昌則 ————— 12-13
- ・アート振興を条例化した先進事例:
「群馬パーセントフォーアート」推進条例 [パーセントフォーアート研究委員会] 高橋章夫 ————— 14
- ・建築美術工芸・よもやま話 [2]
アートって? 会員H & 会員K & 会員T ————— 15
- ・会員作品紹介 [3]
三原庭園: 人を幸せにみちびく庭園アート 石原和幸 ————— 16
- ・協会ニュース ————— 17

多様化する社会をつなぐ、対話を生む空間とコンテンツの創出を

平田オリザ 劇作家、演出家、芸術文化観光専門職大学学長

近年、コミュニケーション力を育むメソッドとして注目されている演劇教育。長年にわたって劇団を率い、演劇を軸に独自のコミュニケーション論を展開してきた平田氏はそのリーダー的存在となっています。氏が志向するのは、演劇による「エンパシー (empathy)」の育成。多様化する現代社会で必要な「合意形成能力 (折り合いをつける力)」を育むとともに、個々がみな役割を担う演劇創作活動によって自己肯定感や自己有用感を伸ばすこと。演劇教育を軸に、地域社会の創生に尽力する氏の考える「共鳴」の在り方について伺いました。

異なる他者を理解する力、「エンパシー」

「シンパシー (sympathy) からエンパシー (empathy) へ」。「同情から共感へ」、あるいは「同一性から共有性へ」。これはずっと私が言い続けていることです。シンパシーは自然に湧き出てくる『かわいそう』といった感情です。かわいそうな人がいると「ああ、かわいそうだな」と心から思う同情心です。

対して「エンパシー」は他者を理解する「共感する力」です。異なる価値観や異なる文化的背景を持った人が「なんでそんなことをしたのか」を理解する能力や技術、態度を指します。

日本語には「エンパシー」にあたる言葉はありませんが、私と

してはこれを「共鳴」や「共感」と言っても良いと考えています。ただ日本語では「私も共感します」と言うと同意しているように受け取られがちですが、エンパシーは「同意はしないけれど理解に努める」「私はそうしないけれど、あなたがそうしたい気持ちはわかる」というものです。「同じになるわけではない」のが大事なのです。

そもそも、「同意はしないが理解に努める」というのは日本人に限らず誰にとっても難しい感情です。人は自分と異なるものに対してはどうしても否定しがちになりますから。そこを一歩踏みとどまって行うものが「対話」です。

「シンパシー/エンパシー」は「会話/対話」とほとんどパラレルな関係にあります。会話は親しい人同士のおしゃべりのように自然に生まれてきますし、察し合うこともできる。しかし対話は異なる価値観を持った人がすり合わせるわけですから説明することが前提になります。たとえよく知っている人同士であっても価値観が異なった時には対話が起こります。

「会話/対話」のもう一つの大きな違いが、会話は家庭などで自然に身につくものですが、対話の力は訓練しないと身につかないということです。学校で学ぶべきコミュニケーション力は「対話力」だと私は考えていますし、企業などで行われているアンガーマネジメントもその一例だと言えます。



演劇ワークショップの様子。平田氏は長年にわたり、演劇的な手法を採り入れた「コミュニケーションに向き合う」ワークショップを実施している
写真提供：豊岡市民プラザ



演劇ワークショップ。写真提供：豊岡市民プラザ

多様化する時代で求められる「対話」の精神

要するに、対話をする。次に大事なのが「とりあえず結論を出す」ことです。

これまでの日本の価値観からすれば「とりあえず」は序列が低いものとされてきました。学校教育でもとことん話し合うことが大切だとされていまして、青春ドラマでも「一晩、徹夜で語り明かそう」という場面はよくありました。しかし、それができたのは、日本が同じ生活習慣や価値観を持っている極めて限られたハイコンテクストな社会だったからです。言葉で多くを説明しなくても互いに理解し合える、察し合える社会で、とことん話せばどうにかなってきたし、どうにかなっている人たちが多かった。でも、もはやそうではない、日本でも個人の価値観はどんどん多様化しているのですから。

ですから「とりあえず」が大事なのです。たとえばパレスチナとイスラエルの問題は、誰もが恒久平和が最善だと思っ

たらばどうするのか。

とりあえず結論を出し、残りの課題は明日考えようというのが対話であり、対話の精神です。

ここでポイントとなるのがディベートと対話の違いです。AとBが戦ってAが勝ったとします。ディベートではBはAに変わりますが、Aはそのまま変わりません。しかし対話ではAもBも変わってCという新しい結論を導き出すことが前提です。ただし宗教やイデオロギーのように強いものを持ち込むと対話は

成立しないので、そこはいったん保留にしながら現実を見る、現象だけを扱うことが大事になってきます。

異なる他者の共鳴に欠かせない「場」

ところで、対話を生むには大事なポイントがあります。「空間の共有」です。対話の最大のルールは「席を立たない」こと。異なる他者が一つの空間に共存する、あるいは空間を共有することではじめて対話は成立します。

ところが、インターネットが急速に普及し、スマホが登場し、さらにコロナ禍があって、個別化・分断化が急激に進んでしまいました。要はひとりで家に閉じこもっていても退屈しない社会になってしまいました。その状況でどうやって「共有する場」をつくるのか、どのように人が集まるのか。今日の文脈で言えば共鳴する場所、あるいは共有地を創出することは大きな問題なのです。

建築家の横文彦さんは渋谷区の代官山ヒルズで低層を組み合わせ意図的にコモンズ＝共有地をつくらうと試みしました。横さんは、共有地はお饅頭の餡子(あんこ)のようなのだとおっしゃっていました。道路側は建物が建っているから外からはよくわからないが、一歩踏み込むとそこには共有地(餡子)があって、子どもたちが安心して遊べる場所になっている、そうした路地裏的共有地が東京の魅力だったのだ、とおっしゃいました。

しかし、どんどんタワーマンションが建つ東京ではエレベーター内では「声かけ禁止」というところも多く、低層階が商業施設だとセキュリティの問題で分断しなければいけなくなっています。一方、地方は車社会で、車が乗り入れられない分譲住宅はあり得ないので路地裏自体がなくなっています。いざ

れにしても共有・共鳴できる場がなくなり、なかなか交流が生みだせない状況になっています。

街のなかに「居場所」をつくる

かつて、地域社会には人が集まる仕掛けが元々ありましたし、かろうじて残っているところもあります。私は今朝もラジオ体操をしに朝6時半に信用金庫の駐車場に子供と一緒に集まりましたが、そういうことが残っている地域はだんだんと特殊なところになってきているのが現状です。

だからこそ、行政の側もアーティストや建築家が総力戦で街づくりの段階から居場所をつくり、コンテンツをつくり込んでいかなければならないし、街全体とどう調和をとっていくかはこれからの建築の課題でもある。それは、私たちアートの課題でもあります。もはやコンテンツと建物が分離していいような時代ではなく、意図的に仕掛けをしていかないといけない時代になっています。これは「鶏が先か卵が先か」のように、場と中身のどちらが先かという問題ではありません。既に多くの地域が建築の段階から中身も議論しながら進めていますし、コミュニティスペースもそういう時代になってきたということだと思います。

実際、これまでも私たちコンテンツをつくる側が建築家の方々と一緒に共有してきた部分もたくさんありますが、特に都市においては場とコンテンツはセットで、人がそこに集まってくる多様なコンテンツがないと、建物も機能しない時代になりました。特に一気に人数を集めるようなコンテンツよりも、バラバラに少しずつ集めるようなコンテンツで、より高いクオリティを持つ仕掛けが重要になってくるように思います。

たとえば子ども食堂に工芸体験をつけるならば、そこに一人、美大出身の工芸家や美術家に入ってもらって格段にクオリティが上がり、その体験が子どもたちの中に非認知スキルや身体的文化資本として残っていくことになります。

肝要なのは芸術文化のコンテンツ

コンテンツの重要性は観光産業という観点からもどんどん増えています。インバウンドが成長している現在、観光産業は日本の数少ない「伸びしろ」であることは間違いありません。でも、伸びるためには何度も来たくなるような仕掛けがどうしても必要になってきます。

そこで重要になってくるのが芸術やスポーツ、食などの文化観光です。ところが、日本は芸術文化のコンテンツが特に弱い。たとえばブロードウェイのように家族で楽しめるミュージカル、初老のご夫婦がカクテルを飲みながらジャズを楽しめるお店といったものもどんどん増やしていかなければならないし、

地域のコンテンツでは工芸はとても大きな日本の強みになるはずで。

いま、姫路では皮革業者の方々がアーティスト・イン・レジデンスの施設をつくり、美術家と陶芸家を招聘して革とのコラボをしているそうです。私が住んでいる豊岡市は鞆づくりがコンテンツのひとつになっています。沖縄の焼き物の街・壺屋通りではシーサーづくりの体験ができます。

いずれにせよ場やコンテンツをつくりあげるには、点と点を繋ぐ企画力が必要になってきます。そして、誰が選んで、誰が企画するのがたいへん大事です。どこかに丸投げするのではなく、ちゃんと人で選ぶこと、芸術監督もパブリックスペースのプロデューサーもちゃんと企画できる人を置くことが大事です。そのためには行政自身にも考える力が必要です。

今やその力はアーティスト側にも必要とされています。残念ながらアーティストがそういう訓練や経験をする機会が今の日本にはほとんどありませんが、ヨーロッパの場合は有能なアーティストほど早い段階にそこで淘汰されていきます。おそらく日本もだんだんとそうになっていくのではないかと思います。

もちろん、全部のアーティストがそうならなければいけないというわけではありませんが、少なくともこれからのアーティストには自分の作品を説明できる力や、自分を生かしてくれるプロデューサーを見つける力が必要になってくると思います。

私自身は人口75,000人の土地に住み、大学をつくり、演劇祭をやりながら成功例を積み重ねることで、なんとか小さな風穴を開けたいと考えています。日本が少しでも風通しのいい国になるように。



平田オリザ(ひらたおりざ)

1962年東京生まれ。劇作家・演出家・青年団主宰。95年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。11年フランス文化通信省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。19年『日本文学盛衰史』で第22回鶴屋南北戯曲賞受賞。21年から芸術文化観光専門職大学初代学長。

芸術文化観光専門職大学について

平田氏が初代学長を務める兵庫県北・但馬に位置する芸術文化観光専門職大学は、「地域での学びが世界につながる」というメッセージの下、芸術文化と観光の二つの視点から地域活性化を担う人材の育成を目指す教育機関です。その教育の大きな軸となっているのが演劇教育です。異なる価値観の間をつなぐ「対話的コミュニケーション」の育成を、演劇というメソッドや、シェアハウス方式の寮生活(1年次)、授業の3分の1を民間企業から自治体まで幅広く現場を体験するフィールドワークに充てた授業体系などにより、地域から世界まで幅広く活躍できる人材育成を目指しています。

「共鳴」の光と影：リベラルアーツの目指すもの

上田紀行 東海学園大学特命副学長・卓越教授、東京工業大学特命教授

「共鳴」とはとても美しい言葉です。私が誰かと共鳴しながら生きていられたら、それはどんなに幸せなことでしょう。そして誰かと誰かが共鳴しあっている姿はとても美しく、私たちに大きな勇気を与えます。

しかし……、私はそこにちょっと横やりを入れたくもなります。それはその「共鳴」の内容が美しいものだからなのであって、美しくない「共鳴」もあるのではないのでしょうか。例えばネット上で「お金持ちのお年寄りを襲って金を奪おう」という呼びかけがされて、見も知らぬ人間が集まって犯罪を犯す。これもある意味での共鳴に違いありません。ヒトラーに共鳴したナチスの人たちがモーツァルトやベートーヴェンの音楽や西洋古典美術をたしなみながらあのおぞましい虐殺を繰り返していったというのは有名な歴史的事実です。犯罪者ではないけれど、企業や事業分野を超えて共鳴しあっての共同プロジェクトが結果的には環境や人間関係の破壊をもたらすということも多々あるのです。

となると、単に「共鳴」すればそれでいいのだということにはなりません。共鳴して目標が達成されれば大成功とはとても言えず、その「目標」や「動機」の質が大きな問題になります。そしてそのことを考え出すと、問題はものすごく複雑で難しいものとなります。だれかと「共鳴」していて幸せな時に、「これって正しい共鳴なのだろうか」と疑ったりするのはとても嫌ですよね。しかしそれは私たちにとって避けては通れない問題で、「共鳴」という美しい世界に足を踏み入れるときに、そうした「リテラシー」のあり方が強く問われてくるのです。

共鳴にとってもう一つの大きな問題があります。それは、私は共鳴しているつもりなんだけど相手からは「全然響き合っていない」と思われてしまっているという、悲しい状況です。

私は今年の3月まで28年間在籍した東京工業大学で、研究指導や講義の他に、全学部の学生が参加できる全学ゼミも担当していました。各自が自由なテーマで発表してそれを全員で議論するというとても自由なゼミです。そしてこの10年あまりは私がリレー講義を担当していた慶應義塾大学看護医療学部の学生も加わってのゼミとなっていました。

そこで数年前、二年続けて看護の学生から東工大の学生たちに向かって同じような内容の発言がありました。「あなたたちは人間らしくない」「人間とロボットの違いが分かってない」「話しているととても傷つく」……。

そのきっかけは「ワークライフバランス」をテーマにした発表でした。

この発表は「看護師をやりながらどのような人生を歩んで

行くべきか」について考察したものでした。彼女たちの多くが先端の病院で看護師として仕事をしますが、そこでは非常に高度な技術と知識を求められ、いったん就職すると、なかなか辞めるに辞められないという現実があります。その一方で、結婚や出産で一旦辞めると、今度は現場を離れたブランクを埋めるのが難しい。日進月歩の高度医療の世界でついていけなくなるかもしれない、若い後輩たちからオバサン扱いされてしまうかもしれないといった不安を感じていて、彼女たちの悩みは尽きません。

ゼミ仲間のその人生の悩みを聞いて、東工大の男子学生は異常にヒートアップし、いつもに増して活発な議論が展開されました。一度職場を辞めた人が戻ってきたときのリカレント教育のシステムはこうしたほうがいいのか、病院の勤務システムや給与システムを変えたらいいのか、いろいろな考察、提案がなされていきました。でも東工大の学生が熱く議論すればするほど、看護学生たちは沈黙していきました。しかしゼミ生の半数が沈黙していることに気づかず、男子学生たちは熱く議論し続けます……。

そして数週間後のゼミ合宿である女子学生がぼつりとこんなことを言いました。「こんなにディスカッションをするゼミは他にないと思います。きっと人間が好きな人たちが集まっているのだらうと思って参加したのですが、東工大の人たちがこんなに人間に興味がないということにビックリしました」。そして他の看護学生も大きくうなずいたのです。これには東工大生たちもびっくりでした。そして私もびっくりしました。東工大という理系の大学の中で、このゼミ生たちは明らかに人間に興味があり、好奇心のある学生たちだったからです。

何がいけなかったのでしょうか。思い返してみれば、ワークライフバランスの発表の時、東工大生が議論していたのは全部「システム」の話でした。システムを改善すれば問題が解決するに違いない……。給与、勤務時間、リカレント教育のシステムの改善……。ただそれを議論すればするほど、「いま目の前に将来の働き方と生き方にとっても悩んでいる同級生がいて、声を発している」という事実からは遠くなっていきました。「ぼくがもし君のパートナーだったら」とか「キャリアと子育ての両立にぼくは何ができるか」とか、当事者としてどうするかという話をする学生は一人もおらず、「共鳴」して話しているつもりが、「全然共鳴しない人たち」と思われてしまったのです。

苦しんでいる人がそこにいるのに、その苦しみに寄り添い、苦しみを引き受けていっしょに考えるという姿勢や発想がまるでなかった……。東工大ゼミ生にとってはとても苦しい体験になりました。そしてゼミ生が全員入れ替わっての次年度の

ゼミでもまったく同じような発言がなされたのも、なかなかショックな体験でした。そもそも看護学部では患者さんの苦しみに寄り添うという言葉が入学以来数千回も繰り返されるのですが、東工大生に「寄り添うって言葉聞いたことある?」と聞くと、「入学以来いちども大学で聞いたことはありません」と断言しますので、そもそも「文化」がまったく違うのですが。

東京工業大学では2012年にリベラルアーツセンターを創設し、2016年にリベラルアーツ研究教育院を創設し、大胆なりベラルアーツ教育改革を開始しましたが、いま振り返ってみると改革に10年以上関わり、創設からの院長も6年務めた私自身、ゼミでの慶應看護学生からのキツイ一言も改革の大きな後押しになっているような気がしています。私自身が中高6年間は男子校で、大学は理科系で入学したのですが、大学で女子学生とお話をしている、「○○ちゃんの話はこういうことだよね」と要約すると、「上田君、私の話聞いてたけど何を聞いてたの?全然違うよ」と言われた個人的な苦い思い出も重なっているのかもしれませんが。

「共鳴」を語る時、その素晴らしさ、それが生み出す創造性と喜びを語るのももちろんですが、何が共鳴を妨げているのか、共鳴という思い込みの暴力となっていないか……等のネガティブ要因も考えていかなければいけません。学問分野や事業分野にはどれもある種の「癖」があります。それは物の考え方の癖とも言えるし、世界をそもそもどう捉えているかという世界観の「癖」でもあります。そして人間ひとりひとりにももちろんその人なりの「癖」があります。その「癖」に気づくことなく、その思考パターンや行動パターンで「良かれ」と思ったことをしても、他の人たちには全然通じないどころか、暴力的な行為だと捉えられてしまうこともあることに気づくことが肝要になります。

日本の大学では、1990年代初頭から「大学は役に立つことをやれ」「即戦力を生みだせ」という圧力が高まり、教養教育が後退し、専門教育を特化する動きが顕著になりました。ただその時代が20年あまり続いてから、そうしたひとつのディシプリンに特化した「即戦力」の人たちが、想定外の出来事が次々と起こり、新たな地球課題や倫理的な問題が生じてくる世界で、イノベティブな働きができないことが明らかになってきて、リベラルアーツ教育の復権という流れとなってきました。リベラルアーツとは「リベラル」「アーツ」つまり自由になる技、自由にする技という意味ですが、これはギリシャ・ローマ時代の二つの階級、「自由市民」と「奴隷」のうち、自由市民が持つべき素養のことです。「教養」から「リベラルアーツ」に言葉が変化した背景には、現代社会で私たちがほんとうに「自由」な

のかという問いがあります。お金が儲かればいい、自分の利得が最大限になればいいといった平板な価値感にとらわれてしまった私たちはほんとうに「自由市民」なのか、自らを拘束する「癖」にがんじがらめの「奴隷」なのではないかという問い返しがあります。

リベラルアーツについてこのところ大きな企業からの講演のご依頼が増えてきました。事情をうかがってみると、リベラルアーツが軽視され「即戦力」として入社した人たちが管理職になる年齢となったものの、いま「自分の軸」は何なのかに悩んでいるという背景があるようです。自分なりの軸、人生哲学、世界の見方がない人は管理職となっても部下に「ひたすら業績を上げろ」としか言えず、魅力的なリーダーにもなれません。そして創発的なイノベーションを生む環境も作れません。そこでもう一回リベラルアーツから人生を見直そうという動きが広まりつつあるのです。

それは自分の癖や弱みを知り、逆に自分の強みは何なのかを知ることであります。かつてのゼミを思い返してみても、もし東工大のゼミ生が自分たちの「寄り添う文化」の不在に気づいていて、だからこそそこで自覚的にきちんと苦しみに寄り添い、それに加えて「ぼくたちの強みはシステムの改善にあるんです!」と言って議論していれば、看護学生の人たちも自分たちの強みと癖にも気づくことができ、そこには「共鳴」が生みだされていたのではと思うのです。

神の恵みのように降ってくる「共鳴」の奇蹟もあります。そして自分の限界や思いに気づき、それを他者とすり合わせながら得られていく「共鳴」もあります。考えてみれば、そうやって新しい自分へと脱皮しながら得られる「共鳴」も、やはり私たちが生きていく中で得られる奇蹟のような体験なのではないでしょうか。



上田紀行 (うえだのりゆき)

1958年東京都生まれ。東京大学教養学部、大学院総合文化研究科博士課程修了、医学博士(岡山大学)。

86年よりスリランカで「悪魔払い」のフィールドワークを行い、文化人類学の立場から「癒やし」を提唱。主要紙の論壇時評を担当、テレビコメンテータも務める。1996年-2024年在職の東京工業大学においては、リベラルアーツ研究教育院を創設して初代院長になり、その後副学長に就任。

主な著書に、「生きる意味」、「立て直す力」、「かけがえない人間」、「目覚めよ仏教! -ダライ・ラマとの対話」、「とがったリーダーを育てる -東工大「リベラルアーツ教育」10年の軌跡」他。

素材を知る[2] 石 建築用石材の進化

矢橋修太郎 矢橋大理石

はじめに

大理石の塊を二つに切って、その切った面を並べると本を開いたような左右対称の模様(ブックマッチ)が現れます。そんな磨かれたばかりの模様の美しさにはいつも感動させられます。ずっと眠っていた石材に新たな生命を吹き込み、それが建築を美しく飾る……そんな瞬間に立ち会える仕事にはいつもロマンを感じています。

今回はそんな建築用石材がわが国でどのように使われてきたのか、将来どうなるのかについてご紹介します。

日本独自の大理石模様の使い方

建築用の石材は組積造の材料としてスタートしました。その後、石材を薄く挽くことが可能になると、今度は化粧材としての新しい顔を持つことになります。

明治時代に西洋近代建築が導入されましたが、木の文化の伝統が長かったわが国では、石材の建築への利用という視点は乏しかったに違いありません。今も残る赤坂迎賓館(1909年竣工)に使われた内部の大理石はすべて製品としてヨーロッパから輸入されたものでした。



赤坂迎賓館 (出典:迎賓館赤坂離宮ホームページより)

その後創業した日本の石材業は、当初は国産の大理石でマントルピースなどの製品を製造するにとどまっていたが、そのうちに欧米を経験した建築主や建築家から、本場ヨーロッパ産の大理石が望まれるようになります。1920年代にはヨーロッパ産の大理石の輸入も始まりました。

一方、当時の設計者は、美しい大理石の模様をどう活かしたらいいかと頭を悩ませたに違いありません。そして試行錯誤を経て、その規範を伝統的な木材の使い方求めたようです。木目を合わせる、振り分ける、流れを揃える、全体に違和感なく納める、という使い方です。

例を挙げれば、1923年竣工の旧丸の内ビルディング1階ホールの柱の「晴雲」(はれぐも、福岡県産)という大理石は、模様も地色もバラバラでまったく統一感がありません。ところが、1937年竣工の東京国立博物館本館の正面階段のある大

ホール壁の「時鳥」(ほととぎす、徳島県産)は、模様が美しく振り分けられ、地色も揃って素晴らしい出来栄です。また、正面の大時計部分の石のむくませ方、階段の手すりの細かな納まりなど、我が国の大理石の加工技術はそのころ頂点に達し、短い間に本場のヨーロッパを追い越してしまいました。

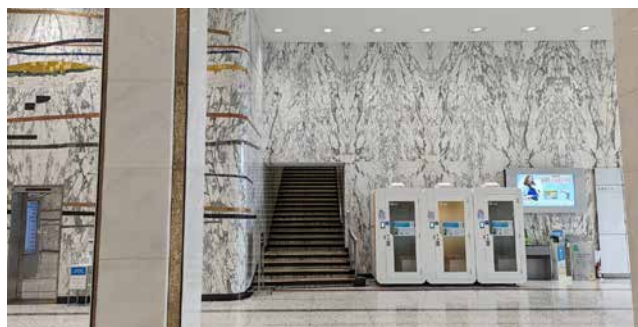


旧丸ビル (提供:三菱地所)



東京国立博物館本館 (提供:東京国立博物館)

この流れは戦争による長い中断の後、戦後も続きます。集大成は新東京ビル(1965年竣工)です。「アラベスカートコルキア」(イタリア産)という大理石の使い方は、ここまでやるかと言うほどの出来栄で、木材に端を発した使い方を完全に超えたレベルに到達したと言えるでしょう。



新東京ビル

ところで、1952年に完成したニューヨークの国連本部の総会議場の議長席の腰壁は、「ヴェルデイソリエ」(イタリア産)という銘石で、緑色の地に白の筋が入った製品が無秩序に貼ってあります。それをバックに演説する各国首脳のニュースを

見るたび、私は演説者よりその背景の方が気になってしまいます。欧米と我が国ではそれほどに模様に対する感覚が違っているのです。

その後、建物の大型化に伴ってひとプロジェクトあたりの大理石の量が増えてくると、大量に供給できる銘柄が多用されるようになりました。それまでのような自己主張の強い銘柄はなくなりましたが、振り分け(ブックマッチ)にしろ、一方流れにしろ、ある統一感を以って使うということが大原則として確立され現在に至っています。

花崗岩の外装使用による、可能性の拡がり

1970年頃から、建物の外装全体に花崗岩(御影石)を使用する例が始めました。当時花崗岩は均一模様の銘柄が多く流通していましたが、製品の元となる原石の地色は均一の色ではありません。この問題の解決にも木材の流儀が適用され、原石の選別と配置法が検討されました。完成形といえるのは名古屋駅前のミッドランドスクエア(2006年竣工)の外壁でしょう。ここで使用しているのは「ポリクローム」というカナダ産の花崗岩です。まず地色の似た原石4個を選び、そこから作った製品をシャッフルして濃淡が変にまだらにならないように一枚のPCパネルに並べます。この作業をすべてのパネルに行い取り付けました。結果として、微妙なばらつきを持ちつつも全体では違和感のない壁が完成しました。

そのうちに、そうした原石間の地色の違いこそが天然の材料ならではの美点ではないかという発想の転換が起きました。とはいえなりゆきで製品を配置していくと、石屋用語の「膏薬貼り」と言われている、濃淡が固まったりして統一感やバランスを欠く状態になってしまいます。そうならぬように、事前にその濃淡やばらつきの割合を把握し、それらがバランスよく散らばるように図面でシミュレーションし、その後に配置に落とし込むという手順が出来上がりました。

「ニューローザパール」(中国産)を使用した大阪御堂筋の本町ガーデンシティ(2010年竣工)は、この例にあたります。

次なる外装の花崗岩の展開は、ダイナミックな模様のある銘柄の採用でした。代表例が、「コロンボジュパバナ」(インド産)が使われた東京日本橋タワー(2015年竣工)です。このときは前もっていくつかの原石を挽いて模様を調べ、使用する模様の許容範囲を決め、許容範囲内で複数の原石の製品をシャッフルして配置しました。

それまで我が国では従来あまり馴染みのない大柄模様で

したが出来栄は素晴らしく、本当に感激しました。石屋として驚いたのは、何と言っても天然の石材の持つ圧倒的な存在感です。石の方から、もっとオレ達を信用していいんだよ、と諭されたような気がしました。

プレーンなものから暴れ馬のような花崗岩の銘柄まで納められるようになった今、木材の呪縛から解放されたとも思っています。



ミッドランドスクエア(左)、本町ガーデンシティ(中)、東京日本橋タワー(右)

これから

昨今は建築需要が旺盛な一方、石材の使用量が伸び悩んでおり、特に大理石がほとんど使われていないという大変残念な状況です。

その原因はなんだろうかと自問自答を繰り返し、我々が思い至ったのは施工スピードです。1平米当たり100kg近い製品を施工場所まで運び、足場の上に揚げて、その上で取りまわす必要があります、当然のことながら時間がかかっていたのです。

そこで、石を厚さ数ミリまで薄くして裏をアルミハニカムで補強し軽量化を図った複合材が開発されましたが、施工方法がなかなか確立できません。その問題を解決するために、ハニカムに穴を開けてアンカーを仕込み、金物で下地と緊結する工法が開発されました。これにより、重さが1/3以下、施工スピードは従来の3倍の施工方法が実現しました。軽量化により軽鉄や木下地での施工も可能となって、大理石の使える範囲がさらに広がることになりました。

前半でお話したように大理石をはじめとする建築用石材の使い方のノウハウはほぼ成熟しています。あとはどう使っただけかを考えるのが我々石屋のミッションです。厚さ数ミリの大理石なんて大理石じゃないという声があるのも十分承知をしていますが、薄くとも天然の材料は十分にその力を持っています。そしてその美しさは変わりません。我々は、お客様のニーズに応えながらそうした天然石の美しさとロマンを伝えていくことをこれからも続けていきたいと考えています。

令和6年度定時総会

開催日:2024年6月12日
会場:建築会館ホール(東京・港区)

総務委員会

6月12日(水)、建築会館1階ホールにおいて、令和6年度定時総会および記念講演が開催されました。

開会に先立ち二本柳敏事務局長より総会成立の為の定足数の確認の報告があり、170名の有効出席者が確認されました。東條隆郎会長の挨拶に続き、定款15条の定めにより、議長には東條会長、議事録署名人には岩淵澄都様、津下庄一様が任命され、定時総会の開催要件が整いました。

令和6年度定時総会

◎議事内容

第一号議案、第二号議案の説明を行うと共に、監査結果の報告が行われました。両議案は、出席者の拍手多数をもって承認、可決されました。

- ・第一号議案(説明:森暢郎副会長)
「令和5年度事業報告に関する件」
- ・第二号議案(説明:二本柳事務局長)
「令和5年度貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び収支決算書に関する件」
- ・報告(森田高年監事)
「令和5年度協会の事業及び会計」についての監査結果報告

◎「令和6年度の事業計画」紹介

東條会長より「令和6年度の事業計画」について、二本柳事務局長より「令和6年度収支予算書」についての説明がありました。

事業計画説明では、昨年度に立ち上げた「パーセントフォーアート研究委員会」の取り組みや、文化事業委員会による「地域創生3連続講演会」の企画など、各委員会の多様な事業計画が詳細に説明されました。

参加された会員の皆様には、活発で多岐にわたる協会活動について、より深くご理解頂く機会になったのではないかと思います。

最後に岩井光男副会長より閉会の挨拶があり、定時総会は滞りなく終了しました。

記念講演

第二部では、森ビル株式会社常務執行役員 新井章邦様に、ご講演をいただきました。

講演タイトルは「麻布台ヒルズ 実現へのプロセス」。巨大再開発の「麻布台ヒルズ」(東京都港区、2023年11月開業)実現までの変遷をご紹介いただきました。

麻布台ヒルズのテーマは「Green & Wellness」、コンセプトは「Modern Urban Village ~ 緑に包まれ、人と人をつなぐ「広場」のような街~」。人々が自然と調和しながら、心身ともに健康で豊かに生きる街の実現に向けて試行錯誤されたデザインコンセプトや、建築デザインのプロセスなど大変興味深いお話を聞くことができました。

また、麻布台ヒルズに設置されている数多くの大型アートや、緑化についてもお話いただきました。まさに建築と共にあるアートの重要性や、「緑に包まれ、人と人をつなぐ広場のような街」を目指し開発された麻布台ヒルズの魅力について、理解の深まる講演でした。

基調講演後、参加者は建築会館の中庭に移動し、芝山哲也常務理事の挨拶で立食形式の懇親会が行われました。

講演者の新井様も懇親会にご参加いただき、会員の皆様との親交を深めていただきました。

最後に米林雄一副会長の中締めの挨拶で懇親会を終了しました。

(委員長 小谷純造)



東條隆郎会長



新井章邦様



記念講演会



麻布台ヒルズ

第7回BOX展

開催日:2024年6月8-14日
会場:建築会館1階ギャラリー(東京・港区)

展覧会委員会

BOX展は、30cm×30cm×30cmの立方空間を自由に使用した作品の公募展です。第7回となる今回は、6月8日(土)から14日(金)まで、建築会館1階ギャラリーにて開催。陶土、大理石、ブロンズ、ステンレス、ガラス、布、スチレンボードやペットボトルなど多彩な材料を使った44点(会員22点、一般19点、学生3点)ものご応募をいただきました。

今回は初の試みとして、開催初日のレセプションパーティーの前にギャラリートークを実施。出品者の皆様から自作についての簡単ご紹介いただきと共に作品への思いも語っていただき、参加者の皆様からも好評をいただきました。引き続き開催されたレセプションも盛り上がり、何よりも参加いただいた方々の交流の輪が広がりました。最終日には表彰式を実施。受賞者と参加された方々との交流の時間も設け、和やかな表彰式となりました。

審査委員

◎審査委員長

米林雄一(東京藝術大学名誉教授、彫刻家)

◎審査員(五十音順)

岡本直枝(テキスタイル造形作家)

齊木慶一(株式会社スペース・メニュー・ラボ代表取締役)

長尾俊夫(株式会社剣持デザイン研究所所長)

中野恵美子(織造形作家)

横山徹(青山学院大学名誉教授、彫刻家)

受賞者(敬称略)

◎最優秀賞

高須好子(会員) 「塊(かたまり)」

◎優秀賞

熊木真由美(会員) 「作品」

小割哲也(一般) 「跡方体」

◎特別賞

横澤有生(学生) 「無題」

◎佳作

阿部剛士(会員) 「1945・春～秋」

上村伴子(会員) 「青に漂う」

齋藤卯乃(会員) 「未来への兆し」

寺本沙香江(一般) 「不思議な命」

中島敦子(一般) 「ごんごん」

◎オーディエンス賞

金原京子(会員) 「無題」

最優秀賞を受賞された高須様の「塊」は、50cm×70cmと40cm×45cmの2枚の布を巧みに美しい塊につくりあげた作品で、審査では高い評価を得ました。優秀賞を受賞された熊木様の「作品」も布、糸を使っており、「染めた布を使った遊び」をテーマにしたものでした。同じく優秀賞の小割様の「跡方体」は、「建築の構造体をモチーフに、その朽ちていく様で時間を表現」した陶器の作品で来館者(オーディエンス)からも多くの票を得ていました。来館者の投票によるオーディエンス賞を受賞された金原様の作品は、「ペットボトルをハサミで4mm幅の紐状に切り、それらを棒に巻きつけ熱を加えてラセンにした」もの。来館者から「ペットボトルとは思えない」「どうやって作るのだろう」といった感想が多く、支持を得ていました。

ご協賛いただきました大成建設株式会社、株式会社エフワンエヌ、株式会社アトリエトラベル、株式会社クサカベ、株式会社名村大成堂、株式会社文房堂、クラフトー2、光ステンド工房様には厚く御礼申し上げますと共に、株式会社フュー様をはじめ運営にご協力、ご支援いただきました皆様に感謝申し上げます。

なお、来年の第8回BOX展は6月8日(日)から14日(土)を予定しています。多くのご応募をお待ちしております。

(委員長 飯田郷介)



高須好子「塊(かたまり)」



熊木真由美「作品」



小割哲也「跡方体」

撮影:小林正

第12回aacaサロン インテリアデザインにおけるアートワークの領域について

会員増強委員会

第12回目となる今回のサロンの内容は、aacaの神髄とも言える、建築とアートの融合について。それぞれの立場で会社代表を務めるお二人をお迎えし、「インテリアデザインにおけるアートワークの領域」をテーマに、じっくりとお話を伺いました。

一人目は2022年に個人会員になられた「ergo」代表の市村陽子さんです。美術大学の油絵学科卒のアーティストで、インテリアに対するアートワーク全般の企画も行っています。

二人目は市村陽子さんのパートナーでもある市村隆剛さんで、インテリアデザイン会社「モノグラフ」の代表を務めています。「アートとの融合が空間にどのような価値を生み出すのか?」ということに深く向き合っています。

今回のサロンでは、両者による協創が生み出す空間やアートの紹介を中心に、そのプロセスやコンセプトメイクのスタンス、コラボレーションの仕方等を深掘りし、来場者からの質問にも都度答えて頂きながらお話を伺いました。

市村陽子さんはまず、アーティストとしての取り組みについて説明。作品の制作過程の紹介では、マーブリングやステンシル、エポキシ樹脂等を使った技法を詳しく解説して頂きました。

空間に相応しいアートをどのようなキーワードで具現化していくのか、オーナーズリクエストによって都度チーム組成を工夫するスタイルや、徹底的に拘った素材感への想い等、非常に興味深いお話を伺うことができました。

各アート作品が設置されている空間は市村隆剛さんのインテリアデザインによるものが多く、都度、空間デザインの志向も織り交ぜながらお話が伺え、如何にアートが空間を惹き立て、空間がアートに寄り添っているかが実感できました。

インテリアデザイナーの市村隆剛さんは、数多くの実作の中から最新作のホテルプロジェクトを紹介。建築やFFE (Furniture[家具]、Fixture[什器]、Equipment[備品]の略称)のデザインは勿論のこと、細々とした装飾や調度品からアートまで、空間全体をトータルでデザインし尽くす意欲とその実行力に触れることができました。

お二人は各々の立場での得意分野を最大限に主張しながらも、チーム力を武器に、一つのスタイルに留まることなく多様なアウトプットを提供している点が大きな特徴のように感じました。また、ブレることのない強固なデザインコンセプトを構築し、一本筋の通った納得性の高い全体空間を生み出している点が、数多くの発注者からの高い評価と信頼に繋がっているように思いました。

最後に「ergo」で協働されている登録アーティストの紹介もありました。この「登録アーティスト」の取り組みが発想の領域を厚くしていることは言うまでもありませんが、アーティストのジョブチャンスを生み出すことにも繋がっているという側面も垣間見られた点は新鮮でした。

また、登録アーティストは非常に興味深い活動をされている方が多く、今後何らかのプロジェクトで協働できる機会が持てたら良いなあと密かに思った次第です。

今回のサロンでは軽いスナックと飲み物を頂きながら和気あいあいとしたムードのもと進行することができました。会場内からも活発な質問が飛び交い、あっという間に予定の1時間半が経過してしまいました。

今回のご登壇を快く引き受けて頂いたお二人に深く感謝致します。

(大林組 大西宏治)

開催日:2024年4月12日

話し手: Ergo代表 アーティスト 市村陽子さん

モノグラフ 代表取締役 市村隆剛さん

モデレーター: 大林組 大西宏治

会場: aaca事務局 (東京・三田)



環境に優しい「ecopoxy」を使ったエポキシ樹脂製のアート作品製作の様子



インテリア・調度品・アート等空間全体としてトータルデザインされた作品の例



浜名湖の気候に近い地中海エリアのテイストを取り入れたデザイン



マテリアルへの拘り(ギリシャで購入したアンティークの壺を火鉢として利用した例)



飲み物を片手にまさに「サロン」の雰囲気で開催された会場の様子

第13回aacaサロン 継承設計の取り組み

会員増強委員会

第13回aacaサロンは、神奈川大学建築学部教授・三菱地所設計エグゼクティブフェローの野村和宣さんをお迎えし、歴史をつなぎ生まれ変わる建築を考える『継承設計の取り組み』について伺いました。野村さんは、登録文化財の耐震改修から歴史的建造物の復元にいたるまで、数多くの継承設計のご経験をおもちです。近代・現代建築の保存活用にあたっての課題として、歴史的価値の継承とあわせて収益を前提とした事業性をあげられた点に、実際の開発・設計に携わってこられた背景を感じました。

価値継承手法の選択においては的確な検討プロセスを踏む必要があり、計画の早い段階で①歴史的価値の位置づけと所在の確認、②機能向上・有効利用に関する課題、③まちづくりへの対応と諸制度の活用、の3つの指標による与件を同時に整理・方針決めすることが重要だそうです。ご紹介いただいたプロジェクトはどれも、それぞれの特質や苦労された点など興味深い内容満載でしたが、ここではその中からいくつかをご紹介します。

◎日本工業倶楽部会館・三菱UFJ信託銀行本店ビル

登録文化財である日本工業倶楽部会館の歴史的価値がどこにあるのかを整理し、特に1階玄関から2階大会堂、3階大食堂までの一連のシークエンスを継承すべきと位置づけ。保存・再現の範囲や関東大震災による影響を考慮しながら耐震補強方法をどうすべきかについて、10案のケーススタディを経て部分保存が望ましいと判断。新築建物の土台の上に免振装置を介して保存建物をのせ、構造上の課題克服と再開発を共存させた。大階段の手すりは戦時中の金属供出で木製にかわっていたものが竣工当時の金属製にもどしている。

◎JPタワー保存棟(旧東京中央郵便局) 吉田鉄郎設計の近代初期モダニズム建築の代表作として全体保存も検討されたが、事業面から最終的に2スパンの躯体を保存修理することにした。外観そのままに1階の床レベルを周囲にあわせて変更しバリアフリーに対応。オリジナルの形状を現代の工法で忠実に復元(復元的整備)を行った。

◎三菱一号館復元計画

1969年に解体された旧三菱一号館を再現。図面だけでなく解体した際に残されていた部材を確認しながら忠実に再現できるかを検証したうえで、実施を判断した。できるだけ創建当時の工法で再現したことも大きな特徴。

◎GINZA KABUKIZA(歌舞伎座・歌舞伎座タワー)

時代の要望に応えながら震災・戦災を経て改修・建て替えをおこなってきた民間の施設を、顧客に愛されてきた外観・内装・空間などの要素を大切にしながら再開発。歌舞伎座の正面が引き立たつように、舞台上部に設置したスーパーストラクチャーで高層棟を支えてセットバックさせた。鉄骨造で木造建築を表現する外装のディテールは、設計面・施工面で緻密な検討をへて実現した。

最後にアーカイブ化の取り組みとして4次元メタバースで歴史的建築物を再現するプロジェクトをご紹介いただきました。ゲーム感覚で過去と現在の建築空間を体験することができ、図面も参照しながら過去の建築を散策することができるので今後の展開が楽しみです。

なお、野村さんは1985年から日本全国2,800カ所以上の集落を歩かれ、その記録を以下で公開されています。是非ご覧ください。

開催日:2024年7月16日

話し手:三菱地所設計 野村和宣さん

モデレーター:NTTファシリティーズ 石原智也

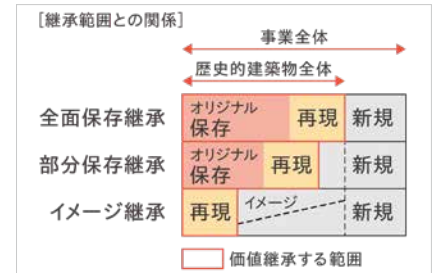
会場:三菱地所設計本社(東京・丸の内)

[集落町並みWalker]

・Web Site <http://www.shurakumachinami.natsu.gs/>

・YouTube ch. <https://www.youtube.com/channel/UCf9uPmJgnaoLMro1BM8Dcw>

(NTTファシリティーズ 石原智也)



建築の保存活用にあたっては、価値継承と機能向上の両立が求められる。価値継承のためには、オリジナルの保存だけでなく再現が必要になる場合がある



会場の様子



三菱一号館



JPタワー保存棟



GINZA KABUKIZA

第205回aacaフォーラム 街とアートが織りなす出会いの場(その4):「ハタオリマチ」視察

フォーラム委員会

今年度のaacaフォーラムのテーマは昨年に引き続き「街とアートが織りなす出会いの場」。今年度初回となる第205回は、第204回「領域をとかず テキスタイルから考えるアートデザインまちづくり」でご紹介いただいた「ハタオリマチ」(山梨県東部の織物の産地)を、講師として登壇いただいた高須賀活良さん引率のもと散策しました。

*第204回フォーラムの内容は、会報98号P11で紹介しています。

山梨の織物が初めて書物に登場したのは平安時代の法律「延喜式(えんぎしき)」(967年)。「甲斐(山梨)の国は布を納めること」という旨の記述があるとのこと。世界に類を見ない技術力が必要とされた幻の織物「甲斐絹(かいき)」をルーツに発展した「ハタオリマチ」では、今なお、クリエイティブな織物職人達が高品質で魅力的な織物を日々生み出し続けています。

1枚の布を完成させるには、糸を撚る「撚糸(ねんし)」から仕上がった反物を検査する「検反」まで様々な工程が必要となります。ハタオリマチには200を超える糸にまつわる会社や工場があり得意とする技術を分業し街全体で織物を生成しています。

視察は、高須賀さん編著によるハタオリマチの織物を楽しく学べる教科書『ハタオリ学』の抜粋版となるパンフレットを手に、まずは工場視察から街の営みの様子見学まで。いざ出発です。



ハタオリ学

◎世界で最も細いシルクカシミアを扱う「武藤」では主に撚糸について視察。消え入りそうな細さの糸を扱う技術に驚愕です。



武藤

◎世界で唯一織物から傘の組み立てまで一貫したものづくりを続ける傘工房「榎田商店」では主に染色について視察。伝統技術を応用した傘づくりに感嘆するばかりです。



榎田商店

◎竣工したばかりの西桂町役場(設計:隈研吾)を視察。ハタオリマチらしく布(「榎田商店」製作の生地)で装飾された壁面やサインは見応えがありました。



西桂町役場

◎ランチは郷土料理「吉田うどん」で腹ごしらえ。この「吉田うどん」。織機を動

開催日:2024年6月15日

引率者:高須賀活良さん・文子さんご夫妻

視察地:山梨県西桂町、

富士吉田市(富士見、下吉田)

かすのは女性の仕事だった昔、行商担当の男性が、女性の作業を滞らせないようにと昼食にうどんをつくるようになったのが発祥なのとか。男性が強い力で地粉をこねたことで太くてコシが強いうどんになったとのこと。

◎座布団専門の織物工場「田辺織物」で巨大なジャカード織機を拝見。初期のコンピューターで使用されたパンチカードの原型となる、図柄を織るために用いる型紙「紋紙」を巻き上げながら、高い天井一杯に超極細の糸を張り巡らせ、歴史を刻んだ織機が動く様は圧巻で、迫力と繊細さに魅了されます。そこから高密度で軽量な織地が誕生する様は神秘的な儀式を垣間見るようです。



田辺織物 ジャカード織機



田辺織物 ジャカード織機

◎「FUJIHIMURO」(設計:坂牛卓)は、製氷工場で作った氷を貯蔵していた氷室をコンヴァートしたギャラリー。当日は地元の交流拠点として地元の人達が活気あるマーケットを開催中でした。



FUJIHIMURO

◎編物工場の跡地をリノベーションした空間で営む縫製メーカー「Mergen」では、地元産の布地を使用した他にはない一点物の洋服を売っています。「繊維産業の技術の集大成としての洋服」をつくりだすアツい入れ込みようにモノづくりの神髄が感じられ、心が躍ります。



集合写真(Mergen)

◎蔵をリノベーションした「KURA HOUSE FUJIYOSHIDA」。台湾のアーティスト デニス・ローさんが滞在制作されていて、工場からでた廃棄予定の糸を素材として活かしたインスタレーション作品を展示中。ご本人による解説は刺激的な出会いとなりました。



KURA HOUSE FUJIYOSHIDA

◎視察を中締めした後は、機屋さんたちが織物商人の方達を接待する場としてお酒や食事を楽しんだ飲み屋街「西裏」散策です。レトロな雰囲気漂う不思議な魅力に溢れる佇まいの中に、生の営みが生き活きと輝いています。

◎最後は「KURA HOUSE FUJIYOSHIDA」のダイニングスペース「蔵の台所」で、高須賀さんが連絡していただき、ハタオリマチを紹介するYouTubeの案内人として有名なMr.フジヨシダ(正体は富士吉田市役所の企画部長)や市のふるさと創生室のスタッフ、「ハタオリマチフェスティバル」ディレクター、前述のローさん、Mergenの店長など、街を盛り上げているのコアメンバーが続々と集まってきていただけ、闊達な意見交換の場が実現しました。



集合写真(蔵の台所)

特徴的な赤いトタンの屋根が印象的なハタオリマチ。昭和の風情を色濃く残したレトロな商店街などを巡り、地元の方々や参加者の方々との語らいにより参加者全員の「領域が溶かされた」得難い一日となりました。

後日、参加者の皆さんからは、

- ・良質の本物に触れられるって面白い。
 - ・細い糸を水で溶ける糸で補強してから織る驚きの工夫は現地でないと判らない。
 - ・古いものが活かされている街には、その土地の文化の厚みと時間が堆積した暖かさが感じられる。
- などの感想が寄せられました。

同じものを見て、同じ時を過ごし、同じテーマを一緒に議論する、そんな基本的なことの大切さを再確認できたフィールドワークとなりました。

それにしても、よく歩いたし、よく語り合った一日だった～!

(委員長 萩尾昌則)

アート振興を条例化した先進事例:「群馬パーセントフォーアート」推進条例

パーセントフォーアート研究委員会

公共の施設を建設する際に、その費用の一定割合(1%前後)を予算として、その建築に芸術・アートを付加するために支出しようという制度、それがパーセントフォーアート(以下、PFA)です。この制度が法律等によって義務付けられれば、必然的に、人々はアートに触れる機会が多くなります。これはaacaの理念「美しくゆとりある環境の街づくりを!」に合致するもので、aaca憲章に「5.文化的な空間創造のための「1パーセント運動」を提唱する。」が掲げられているのは、このことに寄ります。

日本では、1970年代後半から80年代にかけて全国で数多くの自治体が1%事業に着手し、文化行政における一種のブームや流行の様相を呈していましたが、バブル以降は財政難という要因もあって、大半の自治体で事業は終了、90年代以降は立ち消えとなっています。

PFA研究委員会は常置委員会として設立してから約1年。これまでの間、法制化している他国の事例や国内における文化芸術振興の研究・勉強会を重ねてきました。今年7月には、全国初のPFAの条例化を実現させた群馬県を訪問。担当の地域創生部文化振興課において、条例化の背景や経緯、今後の活動などを伺うと共に、意見交換を行ってきました。

2023年4月1日に施行された「群馬パーセントフォーアート」推進条例は、“県予算の一定割合をアート振興に充てることを明文化した全国初の条例”です。欧米発の「1% for art」の精神を生かしながら、アートの持つ様々な力を活用し、人々を惹きつける求心力を持つ群馬県を実現させると共に、県民の幸福度の向上を図るため、条例として制定されました。

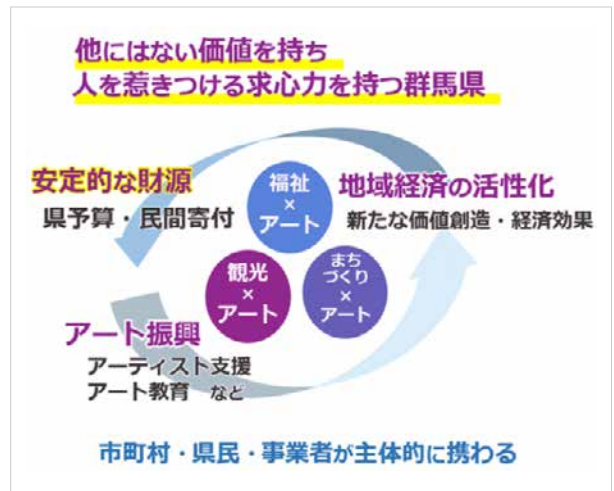
2019年7月に県知事となった山本一太氏は知事立候補前から政策集にPFAを掲げており、それがPFA条例化へ向けた第一歩となりました。群馬なら

ではの芸術活動の推進方策を検討するために「アートによる地域創造会議」を設置。そこでは、公共建築費の1%はパブリックアートではなく、アーティストへの支援、若手の育成に力を入れるべきという意見が主体となり、県としてはモノからコトを中心にこの政策を進め、

- 1.アーティスト支援
 - 2.アート教育・体験
 - 3.地域振興・経済効果
- の3本柱によって取り組むことになっていきます。そして、それは県内にあるアーティスト・イン・レジデンス(作家滞在型制作)へと発展します。

他の自治体においてもPFA政策により建設費の1%を削られることへの抵抗感が大きいとの考えが潜在しており、群馬県としての姿勢を示すことが重要であると条例制定となっていったのです。山本知事は、PFAの根源には「地域が変わり経済がまわるもの」だとする考えもあり、公共事業費の1%を削るという概念から、建設費にその分を上乗せし、投資額を増やし資産価値を高める施策に軸足を置きました。そして令和6年度の予算規模は投資的経費の0.1%となっていました。

意見交換の中では、
・知事が交代になったとしても、条例化されていれば政策は継続される。
・文化芸術振興を継承し発展することが大切。条例をつくって終わりではなくアート振興活動を続けていきたい。
・条例は発展途上、やるべきことはまだまだある。
・パブリックアートは設置だけでは忘れられてしまう。中之条ビエンナーレはアーティスト・イン・レジデンスの滞在制



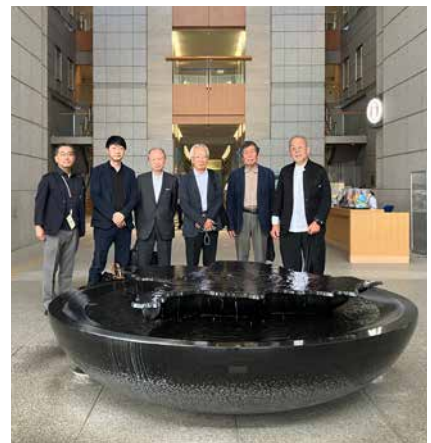
「群馬パーセントフォーアート」推進条例の考え方
(文化庁文化経済部会説明資料より抜粋)

作の成果を発表し、一定期間展示して撤去するが、多くの人が訪れている。維持管理も含めた展示期間の検討も重要だと感じている。

・今後の課題は、群馬県のPFAを行っていくことで県が豊かな社会になることを、県民に気付いてもらう事。など貴重な意見を伺えました。

また、本来は国が制度化すべきだが、国レベルの法制化に至る前に群馬県でやるしかないと進めてきた、といったことも話され、強い意志で政策を推進してきたのだと感じ取ることができました。

当委員会では、aaca会員のPFAへの認知度を高めると共に、近い将来の国の法制化の実現へ向けての活動をしていきます。(委員長 高橋章夫)



群馬県庁エントランスにて。手前は、群馬県の形をしたアート作品

アートって？

会員H & 会員K & 会員T

(見晴らしの良い某テラスバーにて)

H・K・T:カンパ〜イ!

T:夜景見ながらのビールはサイコー!

H:「東京の夜景は残業でできている」って言われることもあるけど、夜景を見ると「サラリーマンの悲哀」を感じる。

K:えー、このキラキラはサラリーマンの悲哀……仕事に限らず、灯りの先には人の営みがあって、それに想いを馳せることもあるわ。だからキラキラきれいな見えるのよ。

H:キレイって言えば、パリ五輪の開会式は観た? 登場する衣装がどれも美しかった。フランスの自国文化に対する誇りみたいなものも感じたなあ。

T:スポーツとアート、社会が当たり前のように地続きで繋がってることを見せつけられたよね。

K:海外に比べると、日本はアートとか文化とかへの理解度は低いし、フランスほどの誇りも持ってないと思うわ。

H:ドイツの連邦文化大臣はコロナ禍の時に「文化はグルメのための特選食品ではない。万人にとってのパンなのだ」って判りやすく表明してた。残念だけど、日本の民度はそこまで醸成されていないよね。

T:アジアでは韓国の文化行政が先進的。90年代後半に、文化コンテンツを国の基幹産業にすると宣言して以後、政府が強力な投資をやって、今や重要な輸出コンテンツにもなってるし……。

H:日本は世界に比べてアートやデザインは根付いていないかもしれないけど、さまざまな再開発でアートを取り組んだプロジェクトが実現して、パブリックアートなどは身近な存在になってきたと思うよ。

T:いわゆる普通の人でもアートとかデザインにアンテナを張るようになってきているね。

K:aacaは憲章で「文化的な空間をつくらう」って謳ってるけど、そもそも「文化的な空間」ってどんな空間?



H:「芸術」「文化」の大切さに異を唱える人は少ないと思うけど、「大切さ」を改めて説明するのは難しいよね。

T:「エモーショナルなもの」がキーワードじゃないかな。感情移入によって共感あるいは違和感が生まれ、気付きや感銘を与え、人々の心を揺さぶり、豊かにしてくれる気がする。

K:私も「心を動かすモノヤコト」って大事だと思う。じゃあ、街や社会を豊かにするアートってどんなものがある?

H:パブリックアートと呼ばれているものは全部そう。あれ? なんだろう? と心が動く。

T:そうだね。でも、ここから見える東京駅、東京タワーなども人の記憶に残る存在だから、街と一体になったアートと言えると思う。

H:ちなみに、皇居の奥にある明治神宮は、新一万円札の渋沢栄一が関わっている事業なんだよ。

K:え、そうなの? 物語はあるけどさすがにアートじゃないんじゃない?

T:場所そのものがアートというものは、イサム・ノグチがデザインした「モエレ沼公園」みたいな例もある。

H:人の記憶と共にある、という意味では、渋谷のハチ公像はアート。

K:じゃあ、上野の西郷さんもアート? ちょっと違う気がするけど。

H:オブジェでいうと、タコの滑り台は子供の心は動くけど、エンタメであってエモーショナルなものじゃない。

K:グラフィティアートやストリートアートも昔は汚されたと思われ消される存在だったけど、今は違う。

H:AI作品はアートかという議論もあるけど、あれは創造性を問うているんだよね。

T:アートの定義は難しいね。いずれにしても美的であってほしいな。

H:圧倒的なパワーのある大先生の作品は多くの人の心を動かすのは確かだけど、身近なレベルの作品やちょっとした仕掛けのようなものも、誰かの心は動かせるから、大事だと思うなあ。

T:そうそう、いろんなものがあると、自分とは異なる価値観や視点にも気付くから、他者への想像力なんかも活性化するよね。それも大事なこと。

K:うんうん。持続可能な「共生」する社会づくりには大切なことよね。

H:ちょっと現実的な話になるけど、持続可能という点でいうと、「心を動かすモノヤコト」はしっかり維持管理されて、愛し続けられることが「みんなのアート」とっては大切だよな。

T:あと、経済合理性が通底にある日本では、一見「芸術」「文化」への理解があるようでも、公共に設置するものは判りやすいアートが選ばれる傾向にある。

H:インスタ映えするアートね。地域活性化に利用しやすいから仕方ない。とは言え、「芸術」「文化」当事者にとっては歯痒い現実だよなあ。

K:そういう問題もあるけど、パブリックアートの醍醐味は、誰でもただでアート体験できることだと思うの。

H:社会課題として注目されている、子どもたちへの「体験機会」の提供にもなるよね。

T:結局のところ、豊かな街づくりとは、多様な出来ごとの創出の場づくり、ということなんだろうね。

H:なんだかビルの灯りが減ってきたね。そろそろ締めにして帰ろうか。残業している方々に(夜景に)、かんぱ〜い!

三原庭園:人を幸せにみちびく庭園アート

石原和幸 庭園デザイナー



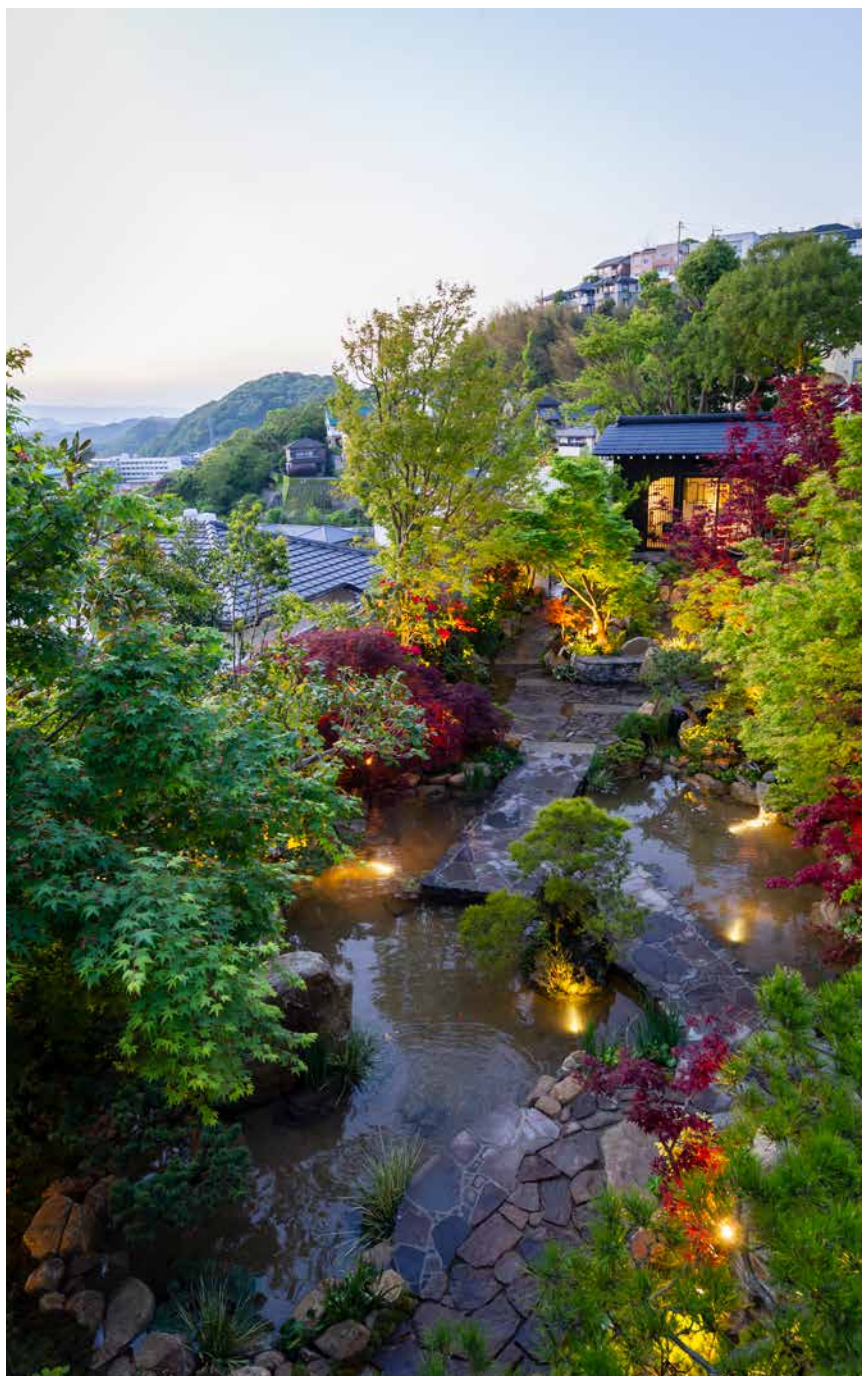
シンガポールがシティ・イン・ア・ガーデン(庭園のような緑あふれる街)という考え方で国づくりを進めていることはご存じでしょうか。私は庭園デザイナーの仕事をする中で、日本こそが「庭の中に国/街があるような開発」ができないだろうかと考えてきました。

江戸時代、日本には1,000近くの庭(大名屋敷)があり、世界でも有数の庭が多い国でした。庭は日本の誇りであり、280年間1度も戦争がない平和で栄えた時代の象徴的な存在だったとも言えます。そこで私は、自分の生まれ故郷である長崎市三原に、自らの手で「その中に街があるような庭」を作り、庭から街を元気にしていこうと決心。空き家を壊し、そこを庭に変え、斜面地の多い長崎の地形を生かし壁にはアートを描き、庭づくりを始めてから5年、年間10万人の方が訪れるようになりました。

三原庭園は型にはまった日本庭園ではなく、さまざまな工夫が施されています。その中で力を発揮しているのが、かつて使っていたものを活用した手作りの工芸アートです。鬼瓦を壁に埋めたり、井戸の石の壁をフレームとして活用したり。そう、古い物をつかった作品は人の心をなごませ、通常とは違う使い方をすることで驚きや美しさも生まれます。私は、こういったものもまた現代アートとも言えるのではないかと考えています。

長崎に斜面があるように、日本の地方には世界にない風景がたくさんあります。そこに庭園とアートを組み合わせれば必ず世界の人々が注目する街になりえるのではないのでしょうか。

三原庭園には複数の店舗があり、民泊も始まりました。シングルマザーや定年された方々の雇用を生みだし、アメリカ、東京、インドネシア、千葉、大阪から、5組



の家族や団体の方が移住してきました。日本の地方に、同様の庭園を中心にした街ができれば、日本の津々浦々に雇用が増え、2拠点生活等により都市に集中している人口が地方へも流れ、ダブルワークも推進して豊かな暮らし方も可能になります。

今の時代だからこそ、日本の地方に、庭園とアートを組み合わせた街づくりが大切だと考えます。



古井戸の枠を活用した石材アート

委員会だより

[表彰委員会]

AACA賞2024 (第34回)

aacaの協会賞であるAACA賞。協会の設立理念と目的に叶い、建築、美術、工芸、ランドスケープなど様々な分野が協力・融合して創造された文化的環境と美しい芸術的景観を実現させた作品を表彰しています。

◎募集期間:

2024年7月1日[月]~9月6日[金]

◎第一次審査、現地審査

第一次審査にて応募作品の中から、現地審査対象の入選作品を選考。その後、選考委員が分担して作品を訪れ現地審査。

◎公開審査会:11月13日[水]

会場:建築会館大ホール(東京・港区)
対象作品のプレゼンテーション後、投票・意見交換を経て、受賞作品決定。

◎表彰式:12月11日[水]

会場:建築会館大ホール(東京・港区)
「協会設立記念総会」にて表彰。

[展覧会委員会]

『第7回BOX展作品集』を発行

6月8日から1週間にわたり開催した第7回BOX展。全作品を掲載した作品集を発行しました。



[総務委員会]

aaca夏季交流会

新入会員と既存会員との交流の場づくりが目的の夏季交流会。今年は8月26日

に開催しました。参加された新入会員は、個人会員の望月純子さん、法人会員のアイカ工業株式会社 鷹本欣澄さん、吉田愛子さんの3名。今回は「第7回BOX展」の入賞者の方々もご招待しました。

会場は、フレッシュな新入会員に加え、今まで参加数が少なかった個人作家の方々で賑わいに満ちており、今後も作家の方々が気軽に参加いただける交流会にしたい、という思いを強くしました。



編集後記

本会報はリデザインから3号目となります。リデザイン第1号は、企画立案から制作まで、大変苦勞しましたが、3号目になると大分慣れてきて徐々にではありますが作業も進歩しています。

広報委員の制作メンバーがそれぞれの役割を果たせるようになり、協力いただく各委員会とのコミュニケーションも円滑に行えるようになってきました。

これからも広報委員会は更に洗練された制作体制を整えて、会員の皆様により充実した会報をお届けできるように努めたいと考えています。

次号は年明け1月に発行予定ですが、これがaaca会報100号です。aacaの永い歴史を物語る100号記念号をどうぞ楽しみにお待ちください。

因みに私事で恐縮ですが、今号をもちまして私は広報委員を退任いたします。今後は一般会員の立場から広報委員会を応援したいと思います。(田島一宏)

本誌の内容に関するご意見・ご感想は、広報委員会までお寄せください。koho@aacajp.com

aaca | 2024.09 | no.99

発行日:

2024年9月30日

発行人:

会長 東條隆郎

発行:

一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014

東京都港区芝5-26-20 建築会館6F

TEL 03-3457-7998

FAX 03-3457-1598

URL <http://www.aacajp.com>

E-Mail info@aacajp.com

編集:

広報委員会

編集長 勝山里美

委員長 田島一宏

副委員長 中村弘子

委員 金原京子 齋藤潮美 竹生田正

津下庄一 森田高年 山崎和子

1-3ページ記事執筆:

吉原佐也香

表紙・フォーマットデザイン:

矢萩喜從郎

表紙に向き合うと

この写真は、とある海外の温室。温室改良に取り組み、建築家、エンジニアの協力で、鉄とガラス張りの構築に定評があったジョセフ・パクストンに設計の白羽の矢が当たり、ハイド・パークに建造されたのが、水晶宮(クリスタル・パレス/1851年)だった。幅約563メートル、奥行き約138メートルという巨大な建築が推された最大の理由は、工期が逼迫していたことに因る。幸運にも、わずか9カ月で完成し、ロンドン万国博覧会に間に合うことができたのである。それ迄の建築の概念を覆すぐらい近代建築に与えた影響は大きく、まさしく建築界の一つの事件となった出来事と言える。万博終了後、一度解体され、1854年にロンドン南部シデナムの丘において更に大きなスケールで複合施設として再建された。多くの来客者を集めていたが、残念ながら消失してしまう。

この水晶宮を訪れていたのが、17歳の時のウィリアム・モリス。モリスは、その水晶宮を「驚くべき醜さ」と評し、見ることを断固拒否したというエピソードを持つ。ジョン・ラスキンの『ヴェニスの石』に感銘し、生活と芸術を復活させる為に中世の手仕事を復活させることを目指し、ロンドンで、「モリス・マーシャル・フォークナー商会」(1861年)を設立する等、イギリスのアール・ヌーヴォーのアーツ・アンド・クラフツ・ムーヴメントを先導していった人には、水晶宮が醸し出す世界は、水と油の様に違い、到底受け入れられる筈がなかったのである。(矢萩喜從郎)

つくるを拓く

MAKE BEYOND



株式会社

佐藤総合計画

代表取締役会長 細田雅春

代表取締役社長 鉾岩 崇

axscom.jp



片引き窓の進化系



かまちと枠を隠し、100mmの見込みの中に入れて納めました。内観は凹凸の少ないフラットなデザインで、上質感と開放感を創り出しています。また、高い断熱性能、水密性能に加え、安心して快適な通風を可能にするスリム網戸を内蔵した革新的なサッシです。

ビルトイン網戸



操作方法については、こちらより動画をご覧ください。



三協立山株式会社 三協アルミ社

ビル建材部 / 〒933-8610 富山県高岡市早川70 TEL(0766)20-2201 <https://buildingsaslh.net/>

これからは、CO₂を削減する自動ドアを。

人にも地球にもやさしい自動ドア

NATRUS⁺e W

ナトラス プラスイー ダブル



赤外線センサー + 画像センサー
Image Sensing W



詳しくはこちら



自動



ナブコシステム株式会社

営業開発部: 東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング32階 TEL.03-3593-0181

BX

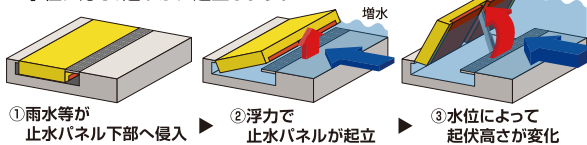
文化シヤッター

水害対策に!

止水高さ2mまで

電源不要、無人で水の浮力により自動で起伏し浸水を防ぐ。

集中豪雨等で水位が急上昇しても止水パネルが水位に応じ、速やかに起立します。



浮力起伏式止水板 アクアフロート



倒伏時は車両の通行も可能

通過耐荷重は最大25t

文化シヤッター株式会社 〒113-8535 東京都文京区西片1丁目17-3 ☎ 0570-666-670

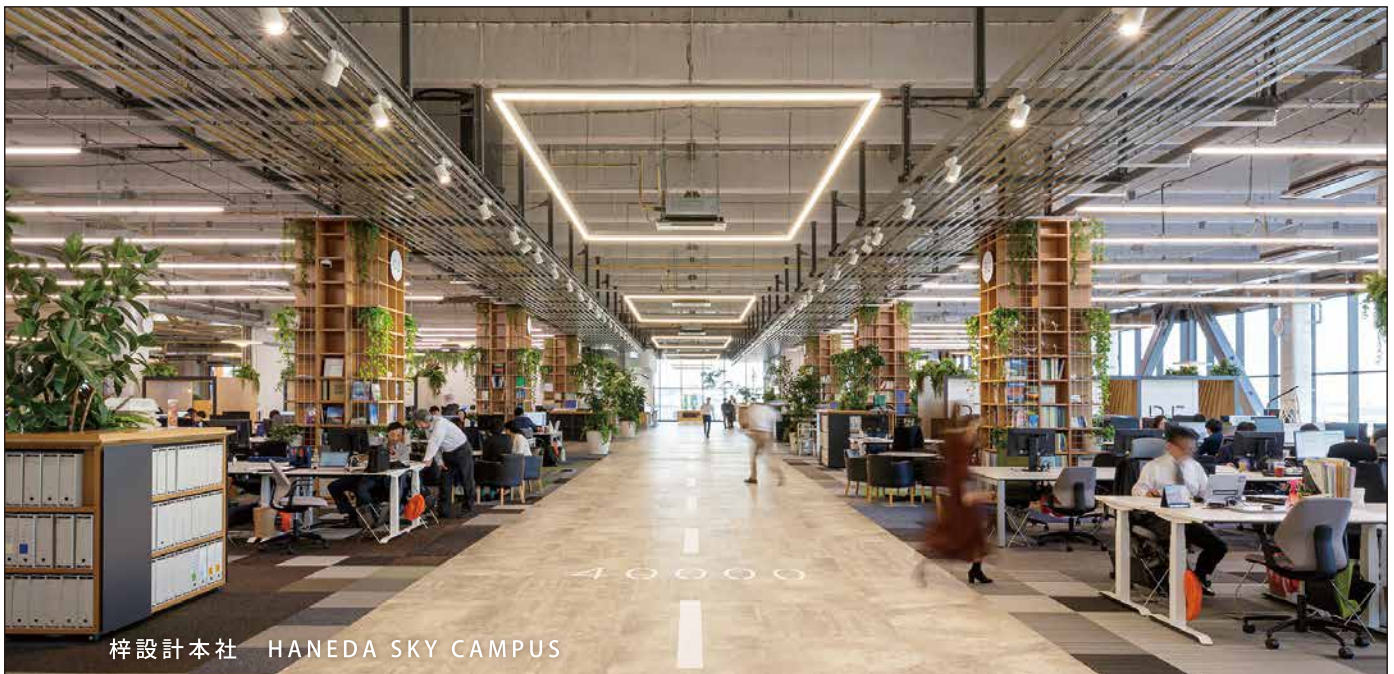


人と自然をつなぐ、伝統と革新をつなぐ。

想いをかたちに 未来へつなぐ

 TAKEMURA

竹中大工道具館（兵庫県神戸市）設計施工：竹中工務店



梓設計本社 HANEDA SKY CAMPUS

建築に、
温度を。

 AZUSA SEKKEI

株式会社 梓設計

<https://www.azusasekkei.co.jp>



 三菱地所設計
Mitsubishi Jisho Design

www.mjd.co.jp

世界的に見ても独自性のあるリッジ
カットを採用した新シリンダー、誕生。

WRcylinder
ダブルアーチシリンダー



 GOOD DESIGN
AWARD 2023



美和ロック株式会社

